

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成22年2月号

平成二十二年二月一日発行 第一巻第二号 発行所 岡井省二 発行日 二月一日発行  
平成二十二年二月一日発行 第一巻第二号 発行所 岡井省二 発行日 二月一日発行



古酒酌んで

高橋将夫

落ちさうで落ちぬところに露の玉  
九月休まず十月は止まらずに  
なにくれとなく氣を配る懸巢かな  
宵闇にゐて心眼を研ぎ澄ます

追憶はみな秋潮のかなたかな

冬瓜ごろんとレム睡眠に入りたる

くぐらんとして見失ふ秋の虹

古酒酌んで何か足りぬ思ひかな

深谷の巖を削る秋の灌

十八周年大会二句

小鳥くる槐に閑谷学校に

相生の星は銀河をめぐりをる

# 槐安集

水野恒彦

黙示録いま冬夕焼あれば足る  
黄落に染まりをみなご攫ふべく  
父の忌や冬の花火を訝しむ  
屈葬の祖母まえ山の冬蕨  
狼の消えてしまひし神の黙

延広禎一

木の実並べ黄泉教へをる奪衣婆  
良に飛白の風ぞ空也ノ忌  
色即是空花野に白洲正子かな  
照紅葉深山勸酒増女  
まごのとと千歳飴ある豊かな



加藤みき

初鏡老眼に吾つやつやと  
さまざまなシンフォニー生れ枯野原  
干蒲団に日の匂ひあり母逝けり  
冬の虹存分に生き丹の骨に  
わが前に不意に現れたるかいつぶり

石脇みはる

小鳥来る空地に犬と老人と  
秋天をひつくり返す逆上り  
立冬や洗ひ終へたる蕪の山  
冬の滝絶ゆることなく渦生まる  
しんと山うしろの山の眠りけり

中島陽華

ラディツシユの酔漬あかあか近松忌  
白ペンキ親子で塗つて小春かな  
キュツと鳴く帯たかだかと事始  
望の月歎喜のシャンパンファイトかな  
黄櫨紅葉モンゴロイドと絵ろうそく

栗栖恵通子

歩行器の油切れたる神迎へ  
黒髪の婆のくつさみかと思ふ  
銀紙のくつついてをる冬の星  
極月の鉢のとらの尾巻いてをる  
虎落笛考を思へば母のこと

竹内悦子

祝ぎごとの終わりにて十月桜かな  
講堂に花頭窓あり楷紅葉  
ちちろ鳴く近くに『明野・鹿野』かな  
鶴の湯の陣屋に吊るす唐辛子  
閑雪の屋敷まるごと石落日和

大島翠木

仄間は淡き枯色ラ・フランス  
十三夜揺り椅子少し揺らしては  
無花果を割りて両手のふさがりぬ  
羊水の月蔵したる冬ざくら  
磐座に枯蠅螂の不思議かな

雨村敏子

観の字のまはりの余白大花野  
勾玉の形に山姫熟れてをる  
レストランメルヘンはサルビアの赤  
シリウスの雫や獅子柚子の太る  
郁子の実のほのとありけり夜の机

小形さとる

岬から踵へ御講日和かな  
舌の上に載せてもみたき小春日や  
神と愛と有機化学と寒昂  
詰めて詰めて詰めて十夜念仏かな  
西を向く人等に混じり年の尾に

本多俊子

閑谷の大きな秋に育まれ  
つかの間の墨匂ひくる花野かな  
たまゆらの愛の炎か万年青の実  
葦原にはるかなるもの拾ひけり  
ちちははに冬の林檎をうすく切る

久津見風牛

凍蝶の乾くのを鳴らしをり  
胎内に還るつもり蛇穴に  
銀杏の落つるに結界なかりける  
狐火や父母に両手をとられぬて  
吊し柿自在の色に紛れきし

近藤 きくえ

秋惜む和綴ノートのぬくみかな  
あれこれと迷はずねまる神の留守  
気と風と水音もろとも冬に入る  
反抗期炬燵かこみて素直なり  
まじまじとつとふれ海鼠買はれけり

近藤 喜子

あめつちの聲ひそめをる鷹野かな  
冬枯や空の青さの常しなへ  
木の葉舞ふ森おほいなる手風琴  
冬かもめ輝き洗ひざらかな  
鮫ひそと歯を研ぎ澄ます海石かな

谷村 幸子

朴落葉ふんで鯨の雲をみき  
黄葉のメタセコイアに立ちつくす  
百済寺の礎石いろどる散り紅葉  
藪巻の声にぎはひし観音山  
裸婦像の脇の秋水汲みにけり

瀬川 公馨

冬濤の丹たんちよん青職人なりしかな  
がらんだうの夢二の丹音三十五世で藍師の寺の職人双眼冬の雲  
霜月や百戦錬磨のロリポップ  
娑婆に出て夜叉五倍子の実の潰れたる  
ツイードのパリジャンの頭の冬帽子

# 槐市集

橋本順子

晴れきつて雪嶺の白強きかな  
小春日やホースの丈を使ひきる  
木の実降る転校生の来る日なり  
かしわ手のよく徹りけり冬木立  
雪嶺の見ゆる小部屋に鏡置く

藤澤陽子

開墾の土を篩ひて秋のゆく  
一水の瞬間光る十二月  
舟の着く大川べりの帰り花  
葱の芽の糸のやうなり藁の下  
草枯や氷河流れし跡といふ

前田美恵子

北吹くや岩屋の楔錆びにける  
水尾の端掴み子鴨の旅始む  
霜の夜や熱き紅茶とウエハース  
冬茜足湯をもらひ受けにけり  
冬霞む天の橋立股のぞき

松下八重美

崖つ縁にあまた咲く石窟空の青  
解禁のボジョレヌーボーにつこりす  
双眼鏡掛けて外して小春かな  
冬ぬくし畝にスコップ突き差しぬ  
短日の空地に子等の声しきり



# 槐集

## 高橋将夫選

猿山の人間百態天高し 枚方 中野 京子

七十路の影ふんでゆき赤のまま

大福を照葉にのせし笑まひかな

色鳥や笑みつつ言葉紡ぎ出し

寝入り端柞の森に入りにつけり

出雲へは歩いてまゐる神の旅 守口 柳川 晋

アスファルトの下は黒土ぬのこづち

一目見て鎌鼬やなど言ふ童子

地の果は海の懐鱈起し

神島の姫が牡蠣打つ十五貫

冬藪やその暗がりに瞳の動く 高松 大山 里

落葉みち音置いて来るついで来る

青空の包みをこぼれ返り花

芒原鬼女に逢ひたくなればくる

冬山がからだの中にすわるかな

弦月の葉裏にまはる愁ひかな 岡崎 松原 伸子

山茶花やあれこれありて一人の座

ジャズの町ゆふべ冬菜の茹でかげん

冬鳥に覗かれてゐる鏡かな

石路の花日影に点る日和かな

カオスより魂よみがへる葛湯かな 枚方 富松 寛子

辻褃のぴたりと合うて冬に入る

もろもろの聲湧く背高泡立草

産聲の海を越えきし十三夜

褻の日々の穏やかなりし秋刀魚焼く

冬きたる死の風紋を描きつつ 東京 西村 純太

枯菊を焚くや遙かに青不動

銀杏散る彼の世の空を染め抜きて

鈴の音や定め命の冬の蜂

風花の無為の虚空に舞ふばかり

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

猿山の人間百態 天高し 中野 京子  
猿山だから沢山の猿がいる。思い思いの姿でいるわけで、まさに猿さまさま、猿百態といったところ。これが普通の景。しかし、掲句は違う。人間百態なのだ。作者が注目しているのは、猿ではなく、猿を見ている人間なのだ。猿を見ている人々を見ている作者がそこにいる。

出雲へは歩いてまゐる神の旅 柳川 晋  
神無月には神々が出雲に集まる。ところで、神々はどんな交通手段で出雲へ行くのだろうか。神様だから飛んで行くのだろうか。昔は電車や車が無かったから御輿かな。いや、徒歩の旅の方が風情があつていい。掲句のおかげで、あれこれ空想を樂しませてもらった。俳諧。

冬山がからだの中にすわるかな 大山 里  
冬山というと枯れきった姿や雪に覆われた厳しい姿などいろいろ思い浮かぶが、静寂の中にとっしりと構えている姿は共通していよう。まさに山眠りである。冬山を見て、自分の体にとっしりした何かの感覚を意識した作者がそこにいる。

山茶花やあれこれありて一人の座 松原 仲子

一人で坐っているのだが、この座が問題。主婦の座、権力の座などいろいろあるが、さまざまな困難を乗り越えて、今その座を確保している。いや、そうではなく、山茶花を見ながら一人で静かに坐り、来し方を振り返っている姿なのだろう。

カオスより魂よみがへる葛湯かな 富松 寛子  
一切は無から生じて無にかえる。「一即一切、一切即一」。とろろとした葛湯を見ていると、魂はこんなカオスの状態から蘇るように思えてくる。ところで、来世があるかどうかは誰にもわからない。証明できないなら、在ると思つた方が心安らかだと私は思っている。

冬きたる死の風紋を描きつつ 西村 純太  
凧が砂丘に風紋を描いて吹きすぎてゆく。厳冬の風紋を前に生と死を見つめる作者がそこにいる。

ジュピターの懐広し尾白鷲 岩月優美子  
ジュピターはローマ神話の天空の神。ギリシア神話でいえばゼウスに当る。大きく翼を広げた尾白鷲の雄姿がジュピターの懐の広さを思わせたのであろう。

甘藷掘つて足もて足を洗ひをる 久保東海司  
甘藷を掘つた後に足の泥を洗っているだけの景。しかし考えてみれば、する方がされる方に、される方がする方になるという、お互い様の関係が見えてくるから面白い。(以下略)